

中世・草戸千軒探検 ②③

つく ~作る(さまざまな細工)~

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を詳しく紹介しています。

前回に続いて、「ものづくり」にかかわった人々の活動の様子を展示資料から紹介します。今回は「作る(さまざまな細工)」のコーナーです。

前回までに、^{ばんしょう}番匠(建築に携わる職人)・^{ぬし}塗師(漆塗りの職人)・からわけづくり(素焼きの土器を作る人々)など、ものづくりに携わる人々が、草戸千軒の集落を舞台に活動していたことを紹介してきましたが、遺跡にはこのほかにも様々な職人の活動の痕跡が残されています。

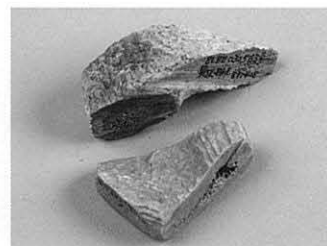
その一つが、骨角製品の製作にかかわった人々の痕跡です。遺跡からは、イヌやウシ・ウマなどの動物の骨が出土していますが、それらの中には刃物による加工の痕跡が認められる資料が含まれています。代表的なものはシカの角や骨を加工したもので、写真1のように様々な形に切断された角や骨の断片が出土しています。こうした断片を観察すると、写真2のように^{のこぎり}鋸や小刀のような工具の痕跡を見付けることができ、何かの目的で角や骨を切り出し、加工していたことが分かります。

一方で、草戸千軒町遺跡からはシカの角や骨を材料にした道具も数多く出土しています。写真3は、当時の人々が髪飾りとして利用した^{こうがい}筥ですが、これはシカの骨を加工したものです。このほかにも、刀の柄や鞘を飾るための道具や、^{さいころ}賽子、^{すごろく}双六の駒(写真4)といった遊戯具など、角や骨を材料とする数多くの道具が出土しています。こうした資料によって、草戸千軒の集落においてシカなどの角や骨を骨角製品に加工する人々が活動していたことが分かってきました。

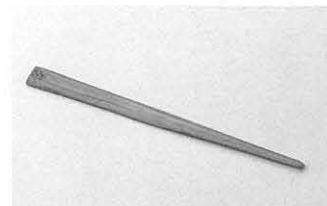
草戸千軒の集落では、このように多様な生活用具の製作に携わる職人が活動していたわけです。これは、草戸千軒が多くの人々が集まる「町」としての性格を持っていたことを示しています。地域における経済拠点の一つとして、草戸千軒の町には多くの人や物、そして情報が集まり、人々の生活を豊かにするための多様な活動が繰り広げられていたことが分かってきました。



(写真1) 様々な形に切断されたシカの角や骨



(写真2) 断片に残る加工の痕跡



(写真3) 筥(長さ13.3cm)



(写真4) 双六の駒(直径1.8cm)

(主任学芸員 鈴木康之)